

論文内容要旨

論文題名：抗悪性腫瘍薬治療患者へのチーム医療における外来看護師の役割
＝外来看護師の面談による「迷い」「不安」の心理的遷移＝

専攻領域名：内部障害リハビリテーション領域

氏名：福地本晴美

内容要旨

【目的】

外来看護師が実施している面談が、抗悪性腫瘍薬治療患者の「迷い」や「不安」に対する心理的遷移に影響を与えているのかを調査し、良質ながん医療を提供するためのチーム医療における外来看護師の役割を明らかにすることを目的とした。

【方法】

対象は、A大学病院の腫瘍内科で抗悪性腫瘍薬治療中の、20歳以上で、PS(Performance Status)0と1、意思疎通が図れる患者55例とした。調査内容は（属性、迷い、不安の有無、外来看護師との面談の有無、面談をしている場合はその内容、DCS Decisional Conflict Scale;意思決定に関する葛藤尺度、以下DCS）として、迷いや不安の有無と面談後の迷い、不安の遷移と面談内容の関連を検討した。

【結果】

対象者は、年齢37～85歳（平均年齢63.3±11.5歳）性別は男性43.6%、女性56.4%だった。抗悪性腫瘍薬治療患者の意思決定の葛藤は、すべての項目において25点以下はなく、自信を持って意思決定をしていなかった。特に不確かさの項目は41.5点と高く、意思決定の選択に迷い、自信がないことを示していた。治療前は、35%が迷いを、71%が不安を感じていた。面談により、迷いが69%、不安が67%減少した。迷いの「なし群」においても62%で面談により、迷いが減少し、迷いが増加したと回答した人はいなかった。不安が「なし群」においても73%で不安が減少し、不安が増加したと回答した人はいなかった。迷いの減少には、「がんと向き合うための行動が明確になる」「抗悪性腫瘍薬の治療経過が分かる」「社会資源の情報提供がある」面談内容が有効だった。不安の減少には、「がんと向き合うための行動が明確になる」「抗悪性腫瘍薬の治療経過が分かる」面談内容が有効だった。

【結論】

抗悪性腫瘍薬治療患者に対して、チーム医療における外来看護師の役割は、医師の補足説明や症状マネジメントだけでなく、患者が抱える葛藤や心理的推移について、看護師間だけでなく医師や薬剤師とも情報共有することで患者の考えを尊重した意思決定や治療選択ができるという重要な役割を果たしている。外来看護師は、患者自身が、がんと向き合うための行動が明確になり、抗悪性腫瘍薬で予測される副作用の予防法や対処法、内服管理方法、自分自身の体調変化などの観察、連絡が必要な状況や連絡方法など具体的に理解し行動できるように支援することが必要である。良質ながん医療を提供するためには、患者の迷いや不安の軽減をはかり、安心して治療継続できるようにすることが、チーム医療における外来看護師の重要な役割であることが明らかになった。